

人生のルール

フレイ・ウェルダン

深町眞理子訳

THE
RULES
OF
LIFE

Fay Weldon

ルール

江苏工业学院图书馆
藏书章

福武書店

Fay Weldon; *The Rules of Life*

©Fay Weldon, 1987

Japanese translation rights arranged with Century Hutchinson Publishing Group Limited through Japan UNI Agency, Inc.

フェイ・ウェルダン

人生のルール

深町真理子 訳

1990年5月7日第一刷印刷

1990年5月11日第一刷発行

発行者 福武總一郎

発行所 株式会社 福武書店 〒102 東京都千代田区九段南2-3-28

電話 東京 (03)230-2131 振替 東京 2-87372

印刷所 凸版印刷

製本所 加藤製本

装幀 荒川じんべい

写真 佐藤淳司

©Mariko Fukamachi 1990

Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります

ISBN4-8288-4004-4 C0097

NDC 930 188 192 p

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

人生のルール

いやまったく、なんとおかしな時代だろう！　かく言うわたし、この物語の語り手は、西暦紀元二〇〇二年にあたるこの年、かつて大英博物館だった《神殿》の、堂々たる表玄関に組みこまれたコンソールの前に陣どって、この世界と、わが人生と、そして過去との折り合いをつけようと苦心している。まあできたらわたしの姿を思い描いてみていただきたい。身につけているのは、白いサムナイト——神秘的で、幽遠な趣があり、GNFR、すなわち、グレート・ニュー・フイクションナル・リリジョンに所属する、バルブ分析係の神官が着用する衣だ。初老の小柄な男性だが、その姿をますます卑小に見せているのは、周囲をずらりととりまいて、ちかちかまたたいしている何層もの

電子機器。今日では、これらの装置が、死者の声を生者に送ってくるとされている。

探知係^{ビナイ}の神官たちは、GNFRの階層制度のなかではわれわれの上司にあたるが、これまた白いサムナイトを着用している。ただし、彼らの衣には、燐光を放つ色とりどりの糸が織りこまれていて、そうたやすくは威圧されない人びとをも、威圧しやすいようにできている。じっさいそれは奇妙なながめだ——夜ごと、国じゅうのどこの墓地にも、彼らピナーの神官がうずくまり、ソニーのセンサーをかまえて、愛された、あるいはそれほど愛されなかった死者たちの、かすかに送ってくる声を探知^{ビニング・ダウシ}しようとしている。死者たち——もしくは今日の呼びかたにしたがえば、^{ツァイ・ド}「巻きもどされたもの」たちの。

わたしももう若くはない。立场上、GNFRの所有する知恵を自在に使いこなせるのだから、本来なら、もうとうに、安心立命の境地に達し、たとえ不本意でも、わが身の運命に黙従することを学んでいなくてはならぬところだ。それなのに、い

ま扱っているこのリワインドのつくりだすパターン、その上に手をさまよわせるとき、わが指はふるえる。わたしの胸は、けっして満たされることのない渴望にふくれあがる。触れてはならぬものに触れてみたい——ただしほんのちょっとだけ。さわれぬものにさわってみたい——ただし一度だけなら、もうすこしでさわれそうだったこともある。この死者の声は、通例の声よりも、ピナーの神官たちの認めるのよりも、だいぶ強い。これらリワインドたちから、われわれは知恵を授かるものとされている。しかし、こともあろうに亡霊から知恵を学んだなどという例が、はたしていままでにあっただろうか？　なに、彼らのことなら、どうにでも好きなように呼べばいい——実態は所詮、亡霊にすぎないのだから。

この亡霊、ゲイブリエラ・サンプター——これがその生前の名でもある——は、異例の強さで語りかけてくる。どうやら、人生の哲理について語りたがっているようだ——後知恵という有利な観点からふりかえったそれを。その死までが、除外されずに、そっくり包含されている人生を。もしくはこのわたしが、コンソールの放

射してくるパターンのうちから、それを読みとらねばならない。いまはじめてわれわれの手もとには、たんなる記憶の断片や、わずかににあってくる恨み、発作的な欲望のかけらなどだけでなく、なんらかの理解と完成のための研究資料とすべきものが集まりつつあるのだ。それを語ることは、彼女を苦しめる。声音からもそれが読みとれる。そしてわたしは、人を苦しめることを好まない。たとえその相手が、ゲイブリエラ・サンプターのごとき利己的な、道徳的に頹廢した女であらうとも。

とはいえ、事を決定するのは金を出すものたちであり、それを実施するのはピナーの神官、そしてわれわれバルプの神官は、彼らの判断にしたがわねばならない。と同時にまた、《^{グレート・スクリーン・ライター・イン・ザ・スカイ}天にまします偉大なるシナリオ作家》——略してGSWITS——の判断にも。われわれはみな、《彼》の意志に奉仕するものであり、このわたしとて、身分は卑しくとも、やはり《彼》に仕える神官にほかならぬ。GSWITSを誉めたたえよ。《再生》および《録音》ボタンを押せ。心をひとつにせよ！

ゲイブリエラ・サンプターが、のっけからわたしを驚かせたのは、“創作”に法

則はないはずだから、自分がそうしたければ、わが身の死から物語を始め、生誕で終わらせることもありうる、そう言いきったときだった。自分が望むなら、一生を逆にたどることもできるはずだ。そう、それはたしかに不可能ではない。その声がとりわけ魅力的だったこと、それはあえて言い添えておいてもいいだろう。軽く、低く、ほんのわずか興がっている響きがあり、さらに、すくなくらずわがままそうな響きも。人の死後、声の年齢は人生の盛りのころ、そう、だいたい三十三歳ごろにもどる。かりにピナーの神官たちが肉体的なよみがえりをも可能にしていたなら、そこでもたぶん同様の現象が見られるだろう。お祖父ちゃんのリワインドが、壮年のころの姿で棺からよみがえってくる！ 必ずしも楽しい想像とは言えない。とはいえ、それを言うなら——そしてこれこそはおそらく、GNFRがいまや《西方世界》を席卷しつつある理由でもあらうが——GSWITSとても一生のうちには、いろいろおかしい着想を持ちだしてきている。そのことはわれわれも認めるにやぶさかでない。《彼》の誤りをせいぜい善い方向へ転換せしめるよう努力するこ

と、それは美德のひとつとされている。

さて、ゲイブリエラ・サンプターの陳述はつづく。たしかに創作にはいかなる法則もない。だが人生にはそれがある。だから、生前はわが身のことしか考えず、他人のためになることはほとんどしてこなかった自分だが、死んだいまとなっては、そのいくつかを、後の世に送り届けるお手伝いをしたい——もしくは、より正確には、送り返すお手伝いを。

生前に彼女が見てきたところでは、世の中に広く受けいれられている人生の哲理なるもの——たとえば、船頭が多すぎると船が山にのぼるとか、キッチンの熱氣がいやならば、さっさとそこを出てゆくべきだとか、女が男をほしがるのは、魚が自転車をはしがるようなものだとか——そういった道理の大半は、完全なまやかしであるという。たんなる言葉の配列。人間存在というあやうい構造物を固定するセメント・グラウト。構造物よりもむしろ化粧材。とはいえ、いまこうして死んでみると、二、三のかなりまともな結論に達することができたような気がする。いうなれ

ば、《妥当な法則》——彼女としては、こう呼びたい。

「死んでから三ヵ月ばかりになるけど、お墓の土もだいぶかたまって、墓石を置けるまでになったわ」そう彼女は言う。「これが《妥当な法則》の第一よ。いたって簡単なこと。墓石を置くのは、激情がやわらいでからになさい。悲しみや怒りが軽くなるまで待ちなさい。そうした感情が沈潜するのと同時に、地面も沈下して、落ち着いてくるから。細いくるぶしの肉は消滅するし、高く円い乳房も、完全に変質する。やわらかな目は、溶けて、なくなってしまう」

ちよつと思案してから、ミス・サンプターはつづける。

「あたしの一生を、みんなは成功だったと言ってくれるかしら？ 自分ではそう思うけど。結婚もしなかったし、子供も産まなかった。でも、これこそあたしの人生の最大の功德よ。人間は、生まれてくるといふ運命からのがれるわけにはいかない——生いまれたからには、生いきなけねばならない。だから、生きてるあいだに積むことのできる善業の最たるものは、結婚することで自己の存在の重みを他人に負わせ

るのをやめること。子供を持つことで無責任にそれを次代に受け継がせるのをやめること。これが《法則》の第二と第三よ。人生の目的はほかにもたくさんあるんだし、その大半はつらいことなんだもの。その経験は短ければ短いほどいいの」

決めつけるようにそう言ってから、ふたたび彼女はつづける。

「わたしは自分でも運がよかったと思うわ。死んだときは六十一歳で、心身の機能はまだ衰えていなかったし、いまだに性愛をかきたてることもできたから。それだけですものね、多少なりと人生を生きる価値あるものにしてるのは。足もとがおぼつかなくなることもまだなかったし、背中もまだ曲がっていなかった。目尻には皺ができてたけど、視力そのものはほとんど若いころのまま。歯だって——これはかかりつけの歯医者、エドガー・シンプソンのおかげもだいぶあるけど——まだ白くて、しっかりして、歯並びもよくそろって、なによりも、ぜんぶ自前の歯だったわ。エドガー・シンプソンはね、かわいそうに、あたしに首ったけだったの。あいにくこっちはその気持ちにこたえてやらなかったけど。いちおう頭ではわかってる

のよ——歯医者さんだって、獣医とおなじに、技術の点では普通のお医者さんよりも高度なものを身につけてるってこと。だけどね、あいにくお医者さんとはちがつて、ロマンティックに受けとめるのはやっぱり無理みたい。本来その技術は手先のものだし、そのためになんとなく滑稽なものに見えちゃうのね。そのくせ、歯医者さんが必要だってことはだれひとり疑わない。要するに、この世のすべては不公平なのよ——これが『妥当な法則』のつぎの項目ね。ひよっとすると、いちばん大きな、なにより信頼できる項目かもしれない」

このあとミス・サンプターはさらにつづけて、地球の小ささについて不満をもらす。周囲わずかに二万五千マイル。なんという矮小さ。しかもこの回転するちっぴけな石の球に、何十億という人間がへばりついて、それぞれに生きる意義を探しもとめている。あきれるばかりの、不都合きわまる小ささ！ それでもなお人間たちは、頭をさげて人生というレールに耳を押しつけ、ごろごろと近づいてくる意義の、遠い響きに耳をすませと主張する。ときどき頭をあげて、「ああ、やってくる

ぞ、やってくる。意味が近づいてくる」そう叫びながら。だがもちろん、けっしてそれはそばまではやってこない。どこかの信号は赤のままだし、機関士は過大なまでに責任感旺盛だから、列車は速度を落とし、停止して、やがて消え去る。悟りを目前にして、死がやってくるというわけだ（いや失礼、死者はえてして隠喻をこっちやにする。わたし自身は、彼らリワインドたちよりも、この音声再生装置のほうがよほどあてにならないと考えているが。日ごとGNFRの金庫に流れこんでくるおびただしい財源のうち、ほんの一部を割いて、『真理のテクノロジー』に磨きをかけるというのは、けっして過大な要求ではあるまいに。一部の心あるものは憂えているようだが、それはいまだ搖籃期の域を出ず、成熟には程遠いのである）。

「あたしは白い絹のシフトドレスにくるまれて葬られたわ」と、ようやくまた本筋にもどって、ミス・サンプターはつづける。「フリーダ・マートックに頼んで、とくにつくらせたものよ。年をとって、目が悪くなってるから、ほんとはそんな細かい仕事には向かないんだけど。あのひと、むかしから年をとってた。あたしの子供

のころから、ずっと。使用人階級って、そういう人が多いみたい。あれがあたしのために縫ってくれた最後の服だったわ。あたし、どうしても手縫いでやってくれないで言い張ったの。ミシン縫いは、ああいう繊細な絹地にはごつすぎるから。ミシンでがちゃがちゃやっても切れないようなじょうぶな糸じゃ、じょうぶすぎて、布地のほうが駄目になっちゃう。縫い糸って、布地そのものの繊維よりもごつくっちゃういけないし、縫い針は、布地の織りよりも太くちゃいけないのよ。ミス・マートツクの手、関節炎でひどくねじまがって、気の毒なくらい。針を持つだけで、ずいぶん痛んだらしいわ。でもね、美というものは犠牲によって生みだされるのよ——犠牲と痛苦と忍耐とによって。これもまた、あたしが一生のうちに学んだこと。その証拠に、みじめな奴隷や農奴の手で建てられた宮殿のほうで、公民権を持った、栄養たっぷりの時間労働者の建てたそこらのコンクリートの公会堂なんかより、はるかに手が込んでいて、美しく、人間の向上心というものはるかによく反映してるじゃない？ 犠牲なきところに、神は宿りたまわずつてわけよ。神は血の犠牲が好

きなの。あたしのシフトを縫ってるあいだ、ミス・マートックは痛い、痛いとおぼしっぱなし。おかげですばらしい仕上がりだったわ。死ぬ前にあたし、一、二度ベツドから起きだして、わざわざ試着してみたのよ。鏡を見て、それを着たようすがとても気に入ったので、もうすこしで彼女に、すばらしい仕事をしてくれましたって、お礼の言葉をことづけようとしたほど。でもね、褒めすぎるっていうの、これまたよくないの。気がゆるんで、やる気をなくしちゃうから。これまた《妥当な法則》のひとつね。おまけに、たった一カ所だけ彼女、ボタンホールの糸を切りっぱなしにしてたし。

あたしの死因はね、肝臓癌。べつに悲惨な死にかたでもないわよ。ただすこしずつ元気がなくなって、最後には燃えつきちゃうだけ。どうせ死ぬんなら、ああいうのをおすすめするわね。

あたしが死ぬ前に自分を映してみた鏡——それでミス・マートックの絹のシフトをじっくりながめてみた鏡というのは、古くて、金めっきのふちがついてて、裏に